



東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

牛垣雄矢著：『まちの地理学—まちの見方・考え方—』（書評）

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-04-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 木谷, 隆太郎 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/00179965

各地の気候を捉えようとしている。付録①では、各気候区の世界53地点の気候データ(気温と降水量)を、雨温図やハイサーグラフでなく、クリマダイアグラム(Klimadiagramme)で提示している。これらは最新の気候統計期間(1991~2020)のデータを用いて示されている。このダイアグラムは、まだあまり一般的には使用されていない図であるが、ケッペンの気候区分の判別がしやすいとあり、慣れればケッペンを使用する学校教育には参考となる。各地点の「地勢」「気候特性」は必ず提示されており、各気候区の特徴の比較には利用しやすい。

付録④の「気候学の発展に寄与した世界の研究者とその代表的な研究成果」は気候学の研究史を探る上で重要な項目で、気候学を志す人々には有効な内容である。事典としては希少な内容であろう。

第I編の5章で動的・静的な気候区分に関して多くの内容を詳しく解説しているが、このような本は今まで見たことがない。地理教育に関わる者にとっては有り難い。

重要な語句が赤字で示されていて判りやすいが、全体を通して本書の特徴である図表等が多用されているだけに、個々の図表が小さくなってしまい見にくい部分もある。特に全球の図はカラーではあるが書式の都合上か小さいものが多く、地域を地誌的に考えるには判別しにくい。原典が他に示されていれば利用できるが、多くはこの事典のために作成された図であるためもったいない。地理関係者が馴染んできた平均気温や年降水量の分布図が、全球レベルでは詳細に示されているが、州や地域毎にすべて示されているわけではない。

局地風や気団名などローカルな大気に関連した現象の名称は、地域の生活や文化に根付くものであり、地誌の理解に役立つ内容である。

農林水産業は食糧供給問題との関わりがあり、

世界各地の気候の変動が日本においても日々の食卓に影響してくるため、世界各地の気候の現状を知ることは重要である。農業保険のようなものが水産業でもあるかと思われ、対比させながら紹介されると有り難かった。

都市気候や温暖化などは無意図的な人間による気候の改変である。それに対し、人工降雨などの人工気象あるいは気象改良などと呼ばれる、人間による意図的な気候改変や気候制御についても触れられても良かったかもしれない。それらは温暖化対策でも注目されている事項であろう。

評者としては都市気候をもう少し多く取り上げて欲しかった(僅か3ページ)。現代における身近な大気環境問題であり、産業やエネルギーとも関連が深いし、気候帯によっても都市気候の違いはあると思われる。

温暖化問題に対しては若年層から高齢者まで世界中で意識されることであり、メディアにも取り上げられない日はないほどの問題である。それに対して多様な見方をしてこれからの気候環境を考えるには、本書は内容が豊富で最適な1冊であろう。

気候学や地理学を学ぶ学生さん達が所有するに価値のある1冊であるが、15,400円という価格は躊躇があるかもしれない。地理教育に関わる人達にも、新学習指導要領の内容にかかわる項目が多く書かれているので、学校の図書室や教員室には、常備しておく必要のある事典と思われる。

(原 芳生:学部23期・院11期 大正大学名誉教授)

牛垣雄矢著:『まちの地理学—まちの見方・考え方—』古今書院, 2022年, 111p., 2,860円(税込)

人々はどのような関心をもってまちを歩くの

だろうか。まち行く人の服装に目が向く人もいれば、まち歩きをしながらグルメを楽しむ人、駅前から少し離れた商店街に残るレトロな看板や個性的な店舗に心惹かれる人など、その関心はさまざまである。近年では、街路の形やささいな高低差から、東京の街並みに残る江戸の痕跡に想いをさせたり、アニメーションに登場した場所を巡り、作品に想いをさせる聖地巡礼が人気となったりしている。

しかし、そうしたまちへの興味・関心を、地理学の研究としてどのように位置付ければよいのだろうか。地理学や地理教育の分野では、地域を調査し、その特徴を把握する巡検は重要視されているものの、商業地を対象とした記述は少ない。本書では、こうした疑問に応えるべく、これから地理学を学ぶ大学生を対象に、専門的な視点からまちの特徴や構造を読み解く内容となっている。

他にも、近年では「まち歩き」が人気であり、テレビでの放映や関連書籍の出版が相次いでいるものの、地形や歴史的な要素に注目した内容が多く、商業地に関する記述は少ない。本書の特徴として、商店街などの店舗が集まるまちを対象として書かれている点が挙げられる。

筆者は都市地理学が専門の博士（理学）で、日本の大都市や地方都市を主なフィールドに、商業地の個性・魅力の形成や、その変化の過程・背景について研究している。他にも、都市や地域を地理学的にとらえるために、さまざまな視点からその特徴や構造を把握し、地域的課題とその対策を考察している。

本書は2部構成である。1部では基礎編として、まちの特徴や構造をとらえるためのさまざまな地理的見方・考え方が示されている。

まず1章は、まちの内部の特徴をとらえるための見方・考え方が示されている。例えば、まち歩きの際に目に入る景観一つをとっても、地理学では、その景観が地域の自然、人文・社会的条件

や人間活動が反映されたものとして解釈されている。本章では、さまざまなまちの特徴のとらえ方とともに、近年注目を集める若者のまちや、エスニックタウン、景観などが扱われており、学校現場で行われる地域調査でもこうした視点は大変参考になる。

2章では、まちの内部の構造をとらえるための見方・考え方が示されている。地理学では、土地利用などの指標を2次元もしくは3次元の空間上で把握し、その空間的パターンや法則性、それらがもたらされる背景について研究されてきたものの、まちというミクロスケールな空間現象をモデル化することへの関心は少なかった。

しかし、まちづくりのような地域政策や消費者研究、建築史学といった分野では、まちの内部構造の理論化やモデル化に関心ももたれており、筆者の関心であるまちの構造化に関する研究について、豊富な図表で説明されているのも本書の特徴の一つである。

3章では、中心性からまちをとらえる見方・考え方が示されている。例えば、まちの主要な構成要素である店舗の集積量の違いは、どのような理由によってもたらされるのであろうか。ここでは、都市は中心地の数や規模、位置関係によって階層性を持ち、規模の違いが店舗の数や商圈の違いによって現れるとする中心地理論が扱われ、それを明らかにするため、商圈や路線価、アンケートなどを用いた研究が扱われている。

4章では、都市内部にまちを位置づけ、その中でまちをとらえる見方・考え方が示されている。まちの多くは都市内部に位置しているため、一つのまちの特徴をとらえようとする場合でも、そのまちを取りまく大きな都市圏の一部としても位置付け、相互作用を考える必要がある。

特に、個性的な飲食店や服飾店の集まる魅力的なまちが、大きな都市圏のなかでどのような場所に生じるのかについて考察している点は

興味深い。

5章では、社会の中でまちをとらえる方法が示されている。まちとは、そこに集まる無数の人々によって作りあげられているものであるから、当然、時代背景や、人々の趣向が反映されている。そのため本章では、時代背景の変化や店舗経営の合理化、法制度、公的機関、メディアとまちとの関係、新型コロナの感染拡大など、社会的状況とのかかわりからまちをとらえる見方・考え方が示されている。

2部は、具体的なまちを歩いて、見て、考える実践編である。6章・7章では、東京や東京周辺のまちとして、神田、渋谷、原宿、大久保、神楽坂、秋葉原、川崎、横浜、8章では、大阪のまちとして、大阪駅・梅田駅周辺（キタ）、難波周辺（ミナミ）、アメリカ村、堀江、日本橋、鶴橋が紹介されている。

例えば、神田は古書店のまち、秋葉原はオタク文化のまちとして有名であるが、なぜそのような個性が生まれたのだろうか。本章では、そうした背景について、江戸時代の絵図や過去の地形図、地理学研究で用いられる図表、現在の写真などさまざまな資料を用いて説明されている。

他にも、筆者の関心として、まちの個性が生まれるまでの形成過程について、歴史的な要素や社会的な背景など、さまざまな要素を模式図として関連付けて示しているところも本書の特徴の一つである。学校現場で行われる地域調査においても、前述のように地域の特徴を模式図としてまとめることは有効であると考えられる。

9章では、地方都市のまちとして、甲府、木更津、三島、秩父、高松、高知、長崎が紹介されている。近年では、モータリゼーションの進展、郊外へのSCやロードサイド店の出店により、地方都市の中心市街地ではいわゆるシャッター街となっているまちも散見される。こうした地域の活性化に向けた取り組みに関しても、まちの成り立

ちは地域によってさまざまであることから、地域の実情をよく調査することが必要であることを思わせる。



第1図 京成立石駅北口に残る「呑んべ横丁」
(2022年12月26日、評者撮影)

最後に、評者が学生として、東京学芸大学において筆者の指導を仰いだのは2013年から2018年にかけてであった。当時、漠然と地理への興味を持っていた評者は、江戸城から秋葉原にかけての筆者の巡検に参加し、一つのまちを丹念に観察し、その背後にあるメカニズムを読み解いていく手法に興味を持ち、地理のなかでも都市を専門に学ぶことに決めたことを覚えている。また、この書評を執筆するにあたり、本書の中(p.50)にも登場した東京都葛飾区立石を訪れた。昔ながらの商店街と飲み屋が魅力のこのまちも、今後は再開発され、商業施設が入る高層マンションへの建て替えが決まっている。

この本を手にした「まち」に興味のある方はぜひ、本書の視点を生かし、各々の関心をもって日々刻々と変化する実際のまちを歩き、見て、考えることをお勧めしたい。

(木谷隆太郎：学部64期・院50期 東京都立立川高等学校定時制課程)